

CLOSE-UP

医療チーム64

Medical team

独立行政法人国立病院機構
呉医療センター・中国がんセンター 外来化学

チーム医療で質の高いがん化学療法の完遂をめざす。



チームスタッフ

平田 泰三 腫瘍内科医長

尾崎 慎治 乳腺外科医長

小川 喜通 副薬剤部長



常駐の腫瘍内科医による診察



常駐薬剤師による服薬指導



中国地方のがん医療を牽引する施設として

1889年に創設された呉海軍病院を前身とし、125年の歴史を有する国立病院機構呉医療センター・中国がんセンターは、その名称が示すように中国地方のがん医療を牽引する中核的な施設であり、2006年には呉医療圏で初となる地域がん診療連携拠点病院として指定を受けています。

外来化学療法にも早くから積極的に取り組んでおり、02年に開設された外来化学療法センターでは、多職種連携による「チーム医療」を実践。質の高いがん化学療法の完遂をめざしています。現在は17床（ベッド10床、リクライニングチェア7床）に常駐のスタッフとして、腫瘍内科医1名、看護師3名（がん化学療法看護認定看護師1名）、薬剤師1名（5名による交代制：がん専門薬剤師2名、がん



外来化学療法センター

薬物療法認定薬剤師2名）を配置しており、14年度は4,188件のがん化学療法を実施しています。また、当センターではホルモン療法なども取り扱っており、総実施件数は8,273件に上ります。

各診療科とのカンファレンスで各職種の情報や意見を集約

チーム医療の要は徹底した情報共有とコミュニケーション。その基盤となるのが、外来化学療法を行う診療科ごとに曜日を変えて毎週行っているカンファレンスです。診療科の医師、腫瘍内科医、看護師、薬剤師、必要に応じて臨床心理士や医療ソーシャルワーカーも参加。治療方針や経過を確認・検討しつつ、複数の眼が入ることで独善的な医療に陥ることを防止しています。各職種がそれぞれの役割を通じてベッドサイドから得た情報や意見を出し合うことで早期から副作用や合併症、生活上や社会的な課題に対処するなど、患者さんと医療者、医療者同士のコミュニケーションを密にすることで全人的なケアをめざしています。なお、カンファレンスでは、要領を得た



各診療科との定例カンファレンス

ディスカッションを迅速に行うため、薬剤師が用意する患者データ（レジメンの履歴や抗がん剤の投与量、過去の議事を記載した用紙）を活用し、所要時間は1回15分程度となっています。

経口薬で治療する患者さんはおくすり外来で服薬指導

点滴から経口薬に切り替わった患者さんや外来化学療法センターでの指導が不十分な患者さんへの服薬指導を目的に、12年から専用のブースを設けて「おくすり外来」を開設しています。主治医の診察前に薬剤師が面談を行い、コンプライアンスや副作用の有無、他科処方薬との相互作用などを確認して電子カルテに反映するというもので、主治医はそれらの情報を参考にしながら診察を行います。“隠れていた症状や悩み”を掘り起こせる効果は大きく、今ではホルモン療法や緩和療法を受けている患者さんも対象としています。この取り組みは薬薬連携を通じて、保険薬局による服薬指導や在宅医療支援にも広がりをみせています。

外来という限られた時間の中で、医療者は患者さんのためにどのような支援や情報提供をすべきか。これからもチームで、当院の基本理念「気配りの医療」を追求します。



主治医の診察の前に薬剤師が面談して服薬指導を行う「おくすり外来」

（副薬剤師長 小川 喜通 記）